

共同研究

(二〇一七年四月一日～二〇一八年三月三十一日)

〈重点共同研究〉

投企する古典性―視覚／大衆／現代

(研究代表者 荒木 浩)

(共同研究者名)

稲賀 繁美、石上 阿希、呉座 勇一、伊藤 慎吾、金
容儀、漆崎 まり、今井 秀和、ガリア・トドロヴァ・ペ
トコヴァ・ガブロフスカ、チャン・テイ・チュン・トアン、
ゴウランガ・チャラン・プラダーン、前川 志織、ローレ
ンス・マルソー、飯倉 洋一、上野 友愛、岡田 圭介、
河東 仁、恋田 知子、河野 貴美子、河野 至恩、合
山 林太郎、齋藤 真麻理、竹村 信治、中野 貴文、中
前 正志、野網 摩利子、三戸 信恵、箕浦 尚美、山本
陽子、渡部 泰明、渡辺 麻里子、深谷 大、屋良 健一

郎、平野 多恵、マラル・アンダソヴァ、徳永 誓子、土
田 耕督

(海外共同研究員名)

楊 曉捷、山藤 夏郎、李 愛淑

(研究発表)

〈第五回研究会〉

二〇一七年六月三日

ナタリー・フィリップス「The epistemological significance
of meta-physical beliefs within the socio-political context
of Heian Japan (平安時代の社会・政治的な背景から
見た超(越) 自然的な信仰の認識論的な役割)」
荒木 浩「身を投げる／子を投げる―仏伝の変容と古典の
投企性をめぐって」

二〇一七年六月四日

中前 正志「古典籍展示実践報告―仮構会話体解説文の試みなど―」

〈第六回研究会〉

二〇一七年八月一日

合山 林太郎「様々なる〈和漢〉…日本漢文学プロジェクトの成果と展望」

劉 雨珍「筆談で見る明治前期の中日文学交流」

二〇一七年八月二日

エドアルド・ジュルリーニ「文学は無用か「不朽の盛事」か―平安朝前期に見る「文」の社会的役割とその世界文学における位相」

葛 継勇「『東国至人』から「郷賊」へ、「還俗僧」から「取経者」へ―留学僧円載の人間像と唐人送別詩」

デイスカッサント・滝川 幸司

〈第七回研究会〉

二〇一七年九月二三日

ダニエル・シュライ（ゲストスピーカー）「日本初期中世の歴史意識と王権―将門記から神皇正統記まで」

デイスカッサント・呉座 勇一、テーブルトーク…ダニエ

ル・シュライ「ドイツの日本研究」

二〇一七年九月二四日

金 容儀「柳田國男『遠野物語』の文化コンテンツとしての拡散と受容」

徳永 誓子「五来重の修験道研究」

〈第八回研究会〉

二〇一七年十一月一八日

伊藤 慎吾「導入…全体の概要、学問対象としてのお伽草子の受容史」

上野 友愛「お伽草子絵巻と絵師」

恋田 知子「〈奈良絵本〉の定着と近代文化」

宮腰 直人（ゲストスピーカー）「丹緑本の「発見」と「再創造」」

徳田 和夫（ゲストスピーカー）「海外需要」

二〇一七年十一月一九日

伊藤 慎吾「導入…メディアの中のお伽草子」

久保 華誉（ゲストスピーカー）「お伽草子と子どもの文化」

山本 淳（ゲストスピーカー）「近代文学とお伽草子と坪内逍遙『鉢かつぎ姫』を例に」

近藤 ようこ（ゲストスピーカー）「中世を描くには」

〈第九回研究会〉

二〇一八年一月二〇日

平野 多恵 「おみくじから歌占、託宣歌へー研究・教育・

大衆化の連環ー」

河野 至恩 「20世紀前半の欧米語圏における「日本文学」

認識をめぐる試論」

二〇一八年一月二一日

片岡 真伊 「表紙カヴァーにみる日本近代文学の英訳出版

現場くノッップ社における表紙図版選択と宣伝手法

を中心に」

前島 志保 (ゲストスピーカー) 「拡大される俳句の詩的

可能性ー世紀転換期日本と西洋における俳句、出

版、翻訳」

運動としての大衆文化

(研究代表者 大塚 英志)

〔共同研究者名〕

北浦 寛之、エルナンデス・エルナンデス・アルバロ・ダ

ビド、吉村 和真、山本 忠宏、前川 志織、板倉 史

明、内田 力、菊地 暁、北田 暁大、近藤 和都、嵯

峨 景子、佐野 明子、杉本 仁、鈴木 麻記、鈴木 洋

仁、團 康晃、鶴見 太郎、石田 美紀、萩原 由加里、

ビョーンリオーレ・カム、藤岡 洋、牧野 守、松井 広

志、室井 康成、雑賀 忠宏、ロナルド・ジェフリー・ス

チュワート、川松 あかり、藤嶋 陽子、執行 治平、花

田 史彦、香川 雅信、上原 功一、谷島 貫太、滝浪

佑紀、櫻木 千恵

〔海外共同研究員名〕

浅野 龍哉、蔡 錦佳、齊 梦菲、秦 剛、マーク・スタ

インバーグ

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一七年七月八日

室井 康成 「大衆運動としての柳田民俗学」

コメント…杉本 仁

川口 創 (ゲストスピーカー) 「運動は可能なのかく実践

と検証」

大塚 英志 「私たちが書く憲法前文 公民の民俗学の実践

として」

〈第二回研究会〉

二〇一七年一月四日

マーク・スタインバーグ「Media Theory in Japan—60年代におけるマクルーハン理論の受容をめぐって」

秦剛「魯迅と板垣鷹穂・柳瀬正夢」

大塚英志「牧野守による戦前映画批評家インタビューについて（資料紹介）」

〈第三回研究会〉

二〇一八年二月一七日

竹村民郎（ゲストスピーカー）「労働者の現場から社会を文字に起こす運動は「公民の民俗学」の戦後に於ける実践ととらえられるのか」

アロン・ジェロー（ゲストスピーカー）「映画理論と運動が緊密な関係にあった戦前の映画界をめぐって報告」

石本悠馬（ゲストスピーカー）「メキシコワークショッ

プ「日本のまんが家と地震の日のことを絵巻アニメにしよう」

二〇一八年二月一八日

川松あかり「民俗学は運動たり得るのか」

鈴木洋仁「民俗学は運動たり得るのか」

エルナンデス・エルナンデス・アルバロ・ダビド「調査報告「身体の物語——メキシコプロレス「ルチャリブレ」

レスラーヒアリング」

音と聴覚の文化史

〔研究代表者 細川 周平〕

〔共同研究者名〕

光平 有希、中原 ゆかり、青嶋 絢、秋吉 康晴、宇都宮 聖子、岡崎 峻、奥中 康人、柿沼 敏江、葛西 周、春日 聡、金子 智太郎、久保田 晃弘、齋藤 桂、城 一裕、谷口 文和、土田 牧子、辻本 香子、中川 克志、長崎 励朗、昼間 賢、福田 裕大、福田 貴成、細馬 宏通、横井 一江、吉田 寛、輪島 裕介、渡辺 裕、長門 洋平、越智 朝芳

〔海外共同研究員名〕

キャロリン・ステイブンス、山内 文登

〔研究発表〕

〈第一回研究会〉

二〇一七年五月二〇日

細川 周平「都市騒音の新奇性——関東大震災後のサウンド

スケープと音量知覚の変容」

光平 有希「近代日本における西洋音楽療法受容の勃興と
展開―松沢（前：巢鴨）病院での音楽療法理論と実践
を中心に―」

金子 智太郎「ドキュメンタリー・レコード」

二〇一七年五月二一日

秋吉 康晴「レコードの考古学——「音を書く」機械の由
来をめぐるって」

〈第二回研究会〉

二〇一七年七月二二日

福田 裕大「フランス、黎明期の録音技術・レオン・ス

コット・ド・マルタンヴィルの業績を再検討する」

城 一裕「ポストデジタル以降の音を生み出す構造の構
築」

柿沼 敏江「オノ・ヨーコと音」

二〇一七年七月二三日

全体討論

〈第三回研究会〉

二〇一七年一〇月一四日

久保田 晃弘「遙かなる他者のための芸術 (Art for Other-

ness)」

ポール・デマニス (ゲストスピーカー) 「Snap, Crackle,
Pop: The Sounds of Loose Connections」

二〇一七年一〇月一五日

渡辺 裕『感性文化論』（春秋社、二〇一七）をめぐる討
論会

コメント：長門 洋平、長崎 励朗

〈第四回研究会〉

（所外開催 芦屋市立美術館）

「小杉武久 音楽のピクニック」展の展示と上映映画会

見学

二〇一八年二月一〇日

「PR映画・記録映画・科学映画」上映会

展示見学

二〇一八年二月一一日

「マース・カニングハム舞踊団」上映会

〈第五回研究会〉

二〇一八年二月二四日

葛西 周「音楽実践の場としての温泉」

細馬 宏通「動作の手がかりとしての歌と掛け声：野沢温

泉道祖神祭りの共同作業

キャロリン・ステイブンス「Beales in Japan (Routledge, forthcoming) の予告編」

二〇一八年二月二五日

細川 周平「東アジアのレコード産業」研究会の報告

(二〇一七年一月二七—二八日、台湾開催)

山内 文登「東アジアのレコード産業」研究会の報告

(二〇一七年一月二七—二八日、台湾開催)

山内 文登「方法としての音」

〈国際共同研究〉

説話文学と歴史史料の間に

(研究代表者 倉本 一宏)

〔共同研究者名〕

榎本 渉、荒木 浩、井上 章一、呉座 勇一、ゴ・フオ

ン・ラン、龔 婷、谷口 雄太、堀井 佳代子、東 真

江、石川 久美子、上野 勝之、内田 滢子、大橋 直

義、尾崎 勇、追塩 千尋、加藤 友康、川上 知里、木

下 華子、小峯 和明、佐藤 信、佐野 愛子、関 幸

彦、五月女 肇志、曾根 正人、多田 伊織、蔦尾 和

宏、中町 美香子、中村 康夫、野上 潤一、野本 東
生、白 雲飛、樋口 大祐、藤本 孝一、古橋 信孝、
保立 道久、前田 雅之、松園 斉、三舟 隆之、山下
克明、鈴木 貞美

〔海外共同研究員名〕

グエン・ティ・オワイン、宋 浣範、グエン・ヴー・クイ

ン・ニュー、劉 曉峰、魯 成煥

〔研究発表〕

〈第五回研究会〉

二〇一七年七月八日

鈴木 貞美「『説話』の多義性—文学／歴史／文化史のな

かで」

松園 斉「中世説話集作者の歴史意識について」

内田 滢子「『仮名貞観政要』周辺」

関 幸彦「武威の来歴—保曆問記を考える」

曾根 正人「アジア仏教における因果応報教説と説話—因

果応報教説の占める教義的位置と教義テキストとして

の説話の意義」

〈第六回研究会〉

二〇一七年九月九日

上野 勝之「霊驗的事実体験の記録とその伝承」

佐野 愛子「占城王妃祭祀考」

池上 洵一（ゲストスピーカーカー）「文学の側から読んだ公

家日記」

野上 潤一「林羅山『本朝神社考』による説話の資料化と

その享受について―羅山の学問と近世前期学問史にお

ける一展開をめぐって―」

藤本 孝一「紅梅殿の壺と編纂―説話集を中心として―」

〈第七回研究会〉

（所外開催）国立公文書館・明治大学）

二〇一七年一月九日

国立公文書館にて古記録・説話の閲覧・撮影

明治大学へ移動

樋口 大祐「転生する『太平記』」

保立 道久「早良親王と還俗」

前田 雅之「古典的公共圏の成立期としての後嵯峨院時代

の役割と意味」

山下 克明「平安後期の宿曜道と属星秘法伝承」

川上 知里「『拾遺往生伝』の史実性と文学性」

〈第八回研究会〉

二〇一八年二月一〇日

木下 華子「西行物語の時間について」

五月女 肇志「『百人一首』と和歌説話」

大橋 直義「巡礼・参詣の「記」と説話」

ゴ・フォン・ラン「丁部領王の説話とホアールー祭」

3・11以後のディスクール／『日本文化』

（研究代表者）ワダハマルシアノ ミツヨ

〔共同研究者名〕

坪井 秀人、北浦 寛之、増田 斎、石田 美紀、久保

豊、谷川 建司、木村 朗子、川口 隆行、クリスティー

ナ・岩田・ワイケナント、清水 晶子、高橋 準、菅野

優香、出口 康夫、一ノ瀬 正樹、西村 大志、松浦 雄

介、須藤 遙子、馬 然、木下 千花、長門 洋平

〔海外共同研究員名〕

王 向華

〔研究発表〕

〈第五回研究会〉

二〇一七年五月二七日

ルース・オゼキ（ゲストスピーカーカー）『あるときの物語』

3・11以後の日本文化を外側から見ると…」

コメント・クリスティーナ・岩田・ワイケナント

松浦 雄介「東日本大震災を記憶することの(不)可能性」

西村 大志『安全・安心／安心・安全』の誕生」

清水 晶子「距離の操作と越境の拒絶」

須藤 遙子「自衛隊協力映画としての『シン・ゴジラ』」

被曝首都トーキョーにみるナシヨナリズム」

二〇一七年五月二八日

出口 康夫「代受苦と災後言説のタイポロジー」

北浦 寛之「ポスト3・11映画と震災の想起」

菅野 優香『以後』のイメージ…少女という生きもの」

馬 然「演出するインタビューと、語る身体」『東北記

録映画三部作』を通じて想起する」

万国博覧会と人間の歴史

(研究代表者 佐野 真由子)

〔共同研究者名〕

井上 章一、稲賀 繁美、瀧井 一博、劉 建輝、林 洋

子、青木ルジラルデッリ 美由紀、ロバート・ヘリヤー、

石川 敦子、市川 文彦、岩田 泰、鶴飼 敦子、江原

規由、神田 孝治、澤田 裕二、寺本 敬子、中牧 弘
允、芳賀 徹、増山 一成、武藤 秀太郎、武藤 夕佳
里、橋爪 紳也

〔海外共同研究員名〕

青木 信夫、ウィーベ・カウテルト、シビル・ギルモンド、

徐 蘇斌

〔研究発表〕

〈第六回研究会〉

二〇一七年五月一三日

論集作成に向けた各自のテーマ案発表(各10分程度)と討論

当研究会の「来し方」について

二〇一七年五月一四日

前日の続き

〈第七回研究会〉

二〇一七年八月五日

橋爪 紳也「博覧会と都市開発」

青木ルジラルデッリ 美由紀「〈ご近所〉と〈世界の果て〉

——万国博覧会とオスマン帝国人の世界観」

執行 昭彦(ゲストスピーカー)「万博における日本館の

変遷——日本は日本を海外にどう発信したか?」(森

誠一朗、岸田 匡平との共同発表)

二〇一七年八月六日

亀井 修 (ゲストスピーカー) 「アントロポシオン (人の時代)」とは何か」

神田 孝治 「沖縄国際海洋博覧会とツーリズム——モビリティに注目した考察」

〈第八回研究会〉

二〇一七年十一月一日

井上 さつき (ゲストスピーカー) 「万博から見た国産ピアノの歩み」

武藤 夕佳里 「Shippoー日本の七宝業と万国博覧会」

二〇一七年十一月二日

五月女 賢司 (ゲストスピーカー) 「1970年大阪万博前夜——「万国博を考える会」をめぐって」

増田 斎 「「反博」闘争からみる大阪万博——キリスト教館というパビリオンの存在」

清水 寛之 (ゲストスピーカー) 「万国博覧会における来場者の経験と長期記憶——博物館学と認知心理学の接点」

〈第九回研究会〉

二〇一八年二月一七日

杓名 貴彦 (ゲストスピーカー) 「田中芳男と博覧会・博物館」

シビル・ギルモンド 「ニュルンベルク金工万国博覧会 (1885年) をめぐる複数の視点——ドイツ、フランス、日本、オランダ……」

ロバート・ヘリヤー 「シカゴ「進歩の一世紀」万国博覧会 (1933—1934年) ——茶は反日感情を軟化させる手段として利用されたのか? (付・シアトル万博 (1962年)、スポーケン万博 (1974年) に関する研究プラン)」

次期論集、来年度以降の活動に関する打合せ (1)

二〇一八年二月一八日

青木 信夫 「パナマ万博 (1915年) と中国——その参加事情と中国館建設の意味」

徐 蘇斌 「清末民初期における勸業場の成立と展開」

武藤 秀太郎 「アスタナ万博中国館と「核」エネルギー」

次期論集、来年度以降の活動に関する打合せ (2)

差別から見た日本宗教史再考―社寺と王権に見られる聖と賤
の論理

〔研究代表者 磯前 順一〕

〔共同研究者名〕

マルクス・リュッターマン、石川 肇、鈴木 岩弓、吉村
智博、佐藤 弘夫、小倉 慈司、鈴木 英生、川村 覚
文、山本 昭宏、青野 正明、高柳 健太郎、田辺 明
生、菊田 真司、船田 淳一、太田 恭治、浅居 明彦、
水内 勇太、鍾 以江、佐々田 悠、寺戸 淳子、金沢
豊、西宮 秀紀、井上 智勝、舟橋 健太、鶴見 晃、河
井 信吉、上村 静、安部 智海、竹本 了悟、守中 高
明、関口 寛、岩谷 彩子、久保田 浩、吉田 一彦、小
田 龍哉

〔海外共同研究員名〕

トモエ・イレエネ・M・シユタイネック、ラジ・C・シユ
タイネック、ランジャンナ・ムコバディヤヤー、ダニエル・
ボツマン、スーザン・L・バーンズ、酒井 直樹、和氣
直子、尹 海東、呉 佩珍、片岡 耕平

〔研究発表〕

〈第六回研究会〉

二〇一七年五月二〇日

河井 信吉・川村 覚文「磯前論文（安丸・金光教論）論
評」

司会…上村 静

コメント…磯前 順一

舟橋 健太「カースト論・「不可触民」論 素描」

司会…鍾 以江

コメント…片岡 耕平

〈第七回研究会〉

二〇一七年七月一五日

舟橋報告（第一回より継続討議）

イントロダクション…鍾 以江

司会…小田 龍哉

片岡 耕平「『日本中世の穢と秩序意識』に関する諸々」

司会…小倉 慈司

コメント…小田 龍哉

鈴木英生「メディアとタブー―マスコミと差別表現をめ
ぐって」

司会…山本 昭宏

コメント…青野 正明

〈第八回研究会〉

二〇一七年一〇月一四日

恵楓園DVD上映会

司会…鶴見 晃

糸山 公照 (ゲストスピーカー) 「宗教と差別と公共性」

司会…鶴見 晃

吉村 智博 「国民の物語」の解体 部落史の血統論・民

族論を超えて」

司会…佐々田 悠

コメント…吉田 一彦

〈第九回研究会〉

(所外開催 熊本県熊本市、合志市、益城町)

二〇一七年一二月二日

国立療養所菊池恵楓園見学

二〇一七年一二月三日

益城町・馬水仮設団地見学

〈第十回研究会〉

二〇一八年二月一七日

磯前 順一 「被災の現場に立ち会うこと (1) 東日本大

震災の経験より」

司会…金澤 豊

荻田 真司 (総括)・関口 寛・寺戸 淳子・安部 智海

「熊本調査旅行報告「被災の現場に立ち会うこと (2)」

司会…磯前 順一

論文集の目的について「差別、宗教、公共性をどう論じる

か」

聞き手…荻田 真司

話し手…磯前 順一

全体討議

論文集仮目次について

司会…吉村 智博

報告…各班の編者

来年度報告案について

司会…佐々田 悠

明治日本の比較文明的考察―その遺産の再考―

(研究代表者 瀧井 一博)

[共同研究者名]

牛村 圭、ジョン・グリーン、佐野 真由子、大久保 健

晴、加藤 雄三、林 洋子、石上 阿希、古川 綾子、

五百旗頭 薫、岩谷 十郎、植村 和秀、大川 真、小川 正道、勝部 眞人、國分 典子、塩出 浩之、島田 幸典、清水 唯一朗、谷川 穰、永井 史男、長尾 龍一、中村 尚史、福岡 万里子、前田 勉、松田 宏一郎、山田 央子、岡本 貴久子、浅見 雅男、上野 景文、今野 元、小林 道彦、内藤 一成、奈良岡 聰智、楊 際開、栢居 宏枝、松沢 裕作、三谷 博、アミン・ガティミ

〔海外共同研究員名〕

ハラルド・フース、アリスティア・スウェール

〔研究発表〕

〈第一一回研究会〉

二〇一七年四月一日

光平 有希 「明治後期における呉秀三の音楽療法理論とその思想的背景」

東郷 和彦 (ゲストスピーカー) 「戦後日本の思想的背景

敗戦・降伏・天皇制」

二〇一七年四月一五日

松沢 裕作 「森林管理からみる明治期行政の特質」

〈第一二回研究会〉

二〇一七年六月一六日

佐藤 文隆 (ゲストスピーカー) 「歴史のなかの科学」

井上 章一 「ソビエトとアメリカの明治維新—国際日本研究の可能性—」

二〇一七年六月一七日

長尾 龍一 「日本近代史における文明と文化」

劉 雨珍 「黄遵憲の見た明治日本」

〈第一三回研究会〉

二〇一七年七月二八日

日文研所蔵貴重洋書見学会

野村 興兒 (ゲストスピーカー) 「歴史遺産とまちづくり

—明治150年を迎えるにあたって—」

二〇一七年七月二九日

齊藤 紅葉 (ゲストスピーカー) 「木戸孝允と明治維新」

御厨 貴 (ゲストスピーカー) 「明治史研究臆断」

画像資料 (絵葉書・地図・旅行案内・写真等) による帝国域

内文化の再検討」

(研究代表者 劉 建輝)

〔共同研究者名〕

北浦 寛之、井上 章一、稲賀 繁美、伊東 貴之、松田 利彦、石川 肇、根川 幸男、前川 志織、蔡 敦達、安 藤 潤一郎、井村 哲郎、岡本 貴久子、上垣外 憲一、岸 陽子、小林 茂、小林 善帆、呉 孟晋、白幡 洋三郎、姜 克実、鈴木 貞美、戦 晓梅、单 援朝、塚瀬 進、鳥谷 まゆみ、仲 万美子、松宮 貴之、森田 憲 司、李 相哲、劉 岸偉、森 洋久

〔海外共同研究員名〕

王 中忱、孫 江、徐 興慶、呉 京煥、陳 凌虹、鄭 在貞、王 确

〔研究発表〕

〈第八回研究会〉

二〇一七年八月四日

劉 雨珍「筆談資料から見る明治前期の中日文化交流」

单 荷君「ドイツ統治下の青島における日本人社会の誕生

(1897~1914)」

二〇一七年八月五日

潘 光哲「デジタルデータベースの可能性―胡適を例とし

て」

〈第九回研究会〉

二〇一七年二月二二日

宋 琦「帝国の視野における熱河―避暑山荘および外八廟を現場として」

石川 肇「鳥瞰図から見た帝国―『大正の広重』吉田初三郎の描いた内外地」

二〇一七年二月二三日

劉 建輝『支那服』という画題の成立―近代日本人画家がいかに中国女性を描いてきたか―

〈第一〇回研究会〉

二〇一八年三月二日

嘉本 伊都子「帝国域内におけるインターマリッジと国際結婚・パラオ人女性と内地人男性の「婚姻」をめぐる一考察」

沈 潔(ゲストスピーカー)「『満洲』の都市化と女性生活の記憶」

趙 軍(ゲストスピーカー)「『日本帝国』にとしての『満洲』、「満洲」にとしての『日本帝国』―歴史教科書としての写真集を語る」

崔 博光(ゲストスピーカー)・王 中忱・周 閱(ゲストスピーカー)・田中 寛(ゲストスピーカー)・南

談（ゲストスピーカー）・伊月 知子（ゲストスピーカー）・李 偉（ゲストスピーカー）『『満洲』生活の記憶に関する総合討論』

二〇一八年三月三日

仲 万美子「大連の娯楽空間とところどころ——和物／洋物

ライブ視聴・鑑賞の場のあり方」

吳 京煥「閔野貞と朝鮮」

植民地帝国日本における知と権力

（研究代表者 松田 利彦）

〔共同研究者名〕

瀧井 一博、稲賀 繁美、劉 建輝、飯島 渉、岡崎 まゆみ、小野 容照、加藤 聖文、加藤 道也、河原林 直人、川瀬 貴也、栗原 純、慎 蒼健、通堂 あゆみ、春山 明哲、松田 吉郎、宮崎 聖子、やまだ あつし、長沢 一恵、李 昇燁、中生 勝美

〔海外共同研究員名〕

陳 延媛、李 炯植、洪 宗郁、山本 淨邦（邦彦）、宋 炳卷、鄭 駿永、顔 杳如、呉 叡人、何 義麟

〔研究発表〕

〈国際研究集会「植民地帝国日本における知と権力」〉

二〇一七年一〇月一三日

基調報告：松田 利彦

Session 1 植民地留学生と知の環流

司会：洪 宗郁

鄭 鐘賢「戦後」東京帝国大学留学生の進路と帝国の知の連続・非連続—李萬甲、權重輝、崔應錫等の事例を中心に—

紀 旭峰「植民地台湾からの「留学生」郭明昆—知の構築と実践を中心に—」

コメント：通堂 あゆみ、鄭 駿永

二〇一七年一〇月一四日

Session 2 技術者・技術官僚の知

司会：宮崎 聖子

谷川 竜一「1930年代の朝鮮半島における水力発電所建設技術と建設体制」

蔡 龍保「日治時期台湾総督府の技術官僚の出自とその活動の分析—土木官僚を例として—」

コメント：やまだ あつし、李 炯植

Session 3 植民地と法

司会…中生 勝美

曾 文亮「日治時期における台湾人家族法と植民地統合問題」

國分 典子「植民地支配期における韓国近代憲法思想の展開」

コメント…春山 明哲、岡崎 まゆみ

二〇一七年一〇月一五日

Session 4 植民地と医学

司会…栗原 純

ホイアン・キム「在朝日本人医師」を概念的に解体する…集団伝記学的な基礎分析」

朴 潤栽「白麟濟の近代認識と自由主義」

劉 士永「日本の植民地医学から東アジア国際保健機構へ」

コメント…慎 蒼健、陳 延媛

閉会の挨拶…松田 利彦

東西文明論―日本を東西の中間地として、懸け橋という特殊な使命を与える言説の分析

(研究代表者 デイック・ステゲウエルンス)

〔共同研究者名〕

細川 周平、ジョン・ブリン、楠 綾子、瀧井 一博、松田 宏一郎、奈良岡 聰智、野島 陽子、中西 寛、宇野田 尚哉、米谷 匡史、山口 輝臣、五百旗頭 薫、福家 崇洋、伏見 岳人、ベッカ・コーホナン、トルステン・ヴェーバー

〈第一回研究会〉

二〇一七年一月一八日

デイック・ステゲウエルンス「東西文明論とは？―文明

論、脱亜論、アジア主義、日本人的使命観、東西文明融合・調和論、日本人論、橋渡し役としての日本、日

本文明論、日本的近代思考構造 等々」

宇野田 尚哉「浮田和民・『太陽』と東西文明論」

二〇一七年一月一九日

松田 宏一郎「Oriental Despotism は東洋文明の不可欠の要素か？」

〈第二回研究会〉

二〇一八年一月二〇日

細川 周平「和洋調和楽 東西文明論に脇目を向けて」

デイック・ステゲウエルンス「研究会代表による今までの研究成果(オスロ大会など)の俯瞰・研究員による各

自報告の位置づけ

楠 綾子「1950年代の東西文明論」

〈第三回研究会〉

二〇一八年三月一七日

松田 宏一郎「天譴と文明—文明論言説にとっての「天」と災害」

福家 崇洋「樽井藤吉におけるアジア主義と社会主義の交渉」

二〇一八年三月一八日

米谷 匡史「植民地朝鮮／帝国日本の「世界史の哲学」と「東洋」言説」

〈基幹共同研究〉

戦後日本文化再考

〔研究代表者〕坪井 秀人

〔共同研究者名〕

磯前 順一、郭 南燕、北浦 寛之、石川 肇、増田 斎、田村 美由紀、杉田 智美、長瀬 海、浅野 麗、石川 巧、岩崎 稔、大原 祐治、岡田 秀則、辛島 理人、狩俣 真奈、川口 隆行、北中 淳子、北原 恵、木

村 朗子、紅野 謙介、高 榮蘭、五味洵 典嗣、斉藤 綾子、佐藤 泉、尹 芷汐、塩野 加織、島村 輝、申 知瑛、菅野 優香、鈴木 勝雄、張 政傑、長 志珠絵、十重田 裕一、鳥羽 耕史、戸邊 秀明、成田 龍一、野上 元、朴 貞蘭、橋本 あゆみ、福岡 良明、松原 洋子、水川 敬章、光石 亜由美、美馬 達哉、村上 陽子、李 承俊、鷺谷 花、渡辺 直紀、渡邊 英理、沈 熙燦

〔研究発表〕

〈第一二回研究会〉

〔所外開催 立教大学〕

二〇一七年四月一五日

狩俣 真奈「坂口安吾の戦後作品の肉体に見る〈主体のゆらぎ〉——「白痴」「戦争と一人の女」を中心に——」

長 志珠絵「脱「兵曹文化」への模索——軍港都市・佐世保にみる占領と駐留のはざま——」

二〇一七年四月一六日

パネル発表「〈長い戦後〉のナシヨナリズム——ナシヨナリズムの変貌を考える」

パネル趣旨説明・佐藤 泉

佐藤 泉「ナシヨナリズム、アジア主義、近代の超克——

竹内好・花田清輝・谷川雁らの議論から」

長瀬 海「江藤淳におけるナシヨナリズム——「第三の新人」・「母」・「近代以前」

増田 斎「遠藤周作『沈黙』と宗教ナシヨナリズムの関係

——大阪万国博覧会を視座にして——

尹 芷汐「喚起されるノスタルジアとナシヨナリズム——映画『人間の証明』と西條八十「ぼくの帽子」

〈第一三回研究会〉

二〇一七年六月一八日

〈所外開催 立教大学〉

パネル発表「占領期メディア規制と出版文化 プランゲ文

庫と岩波書店での調査を中心に」

尾崎 名津子（ゲストスピーカー）、塩野 加織、十重田

裕一

野上 元「東京裁判論の「爆発」——1970／80年代を

中心に——

福岡 良明「高度成長と「遺族への配慮」の拒絶——映画

『軍旗はためく下に』における「記憶」の「仁義なき戦

い」

〈第一四回研究会〉

二〇一七年八月二〇日

パネル発表「『運動』と文化」

パネル趣旨説明『戦後日本を読みかえる』……川口 隆行

川口 隆行「二つの「戦後」文化運動——詩人四國五郎

の軌跡——

島村 輝「山村を揺るがした「ダンス至上主義」——「静

かなる山々」と戦後日本共産党の文化運動」

奥村 華子「1960年前後における三池炭鉱の運動と記

憶——

橋本 あゆみ「大西巨人の文学／運動の支柱としての「法

感情」——一九七〇年代前半における障害者の教育を

めぐる運動と『神聖喜劇』

〈第一五回研究会〉

二〇一七年二月二日

パネル発表「セクシュアリティの戦後——〈出来事〉をめ

ぐる想像力と欲望」

パネル趣旨説明……光石 亜由美

河原 梓水「ビキニ事件と人種差別のエロス化——『奇譚ク

ラブ』の日本人畜化小説群から——」

田村 美由紀「核の時代における男性性へのまなざし—性的不能の表象をめぐる」

服部 徹也「日本エイズ文学論への補遺——『熊夫人の告白』を中心に」

〈国際研究集会「戦後日本文化再考」〉

二〇一八年三月二日

所長挨拶：小松 和彦

開会の辞：坪井 秀人「『戦後日本文化再考』を再考する」

基調講演：キャロル・グラック「*Sengomatsu and the Arc of Modernity*」

討論：デイスカッサント：五十嵐 惠邦

二〇一八年三月三日

パネルデイスカッサン

シュテフィ・リビター「*"Now-time", "Tiger's leap" (Benjamin)*

and "Post-(post)war Japan": Some notes 「今時」「虎の跳

躍」(ベンヤミン)と「(ポスト)戦後日本」：再考ノート」

デイスカッサント：戸邊 秀明、申 知瑛、鷺谷 花

志弦「*"Apologetic Juxtaposition: Maksymilian Kolbe-A*

Polish Catholic Martyr in Auschwitz and the Japanese

"Hibakusha Martyrdom in Nagasaki"」

デイスカッサント：辛島 理人、朴 貞蘭、李 承俊

酒井 直樹「*Theory and Anthropological Difference: Toward a*

Minor Politics of Area Studies」

デイスカッサント：斉藤 綾子、沈 熙燦、張 政傑

成田 龍一「近代のなかの「戦後」／「戦後」のなかの明

治——「維新150年」と「戦後70年」のあいだ」

デイスカッサント：石川 巧、尹 芷汐、橋本 あゆみ

ラウンドテーブル

司会：坪井 秀人

比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想——王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼——

(研究代表者 伊東 貴之)

(共同研究者名)

倉本 一宏、井上 章一、瀧井 一博、ジョン・ブリー

ン、松田 利彦、劉 建輝、榎本 渉、フレデリック・ク

レインス、マルクス・リュッターマン、佐野 真由子、山

村 奨、佐藤 将之、青木 隆、新井 菜穂子、井上 厚

史、恩田 裕正、垣内 景子、橋川 智昭、権 純哲、小

島 毅、関 智英、末木 文美士、錢 国紅、竹村 英
 二、竹村 民郎、田尻 祐一郎、土田 健次郎、永富 青
 地、西澤 治彦、長谷部 英一、林 文孝、松下 道信、
 水口 拓寿、横手 裕、李 梁、吾妻 重二、新田 元
 規、石井 剛、伊藤 聡、井ノ口 哲也、内山 直樹、遠
 藤 基郎、大久保 良峻、苅部 直、黒岩 高、岸本 美
 緒、児島 恭子、近藤 成一、佐々木 愛、杉山 清浩、
 高柳 信夫、葭森 健介、保立 道久、李 曉東、本間
 次彦、松野 敏之、石川 洋、澤井 啓一、渡邊 義浩、
 前田 勉、渡辺 美季、平野 千果子、中 純夫、古勝
 隆一、茂木 敏夫、重田 みち、周 圓、田口 由香、豊
 田 裕章

〔海外共同研究員名〕

張 啓雄、葛 兆光、手島 崇裕、ベンジャミン・A・エ
 ルマン

〈第六回研究会〉

二〇一七年五月二〇日

橋川 智昭「新訳唯識宗の形成について」

永富 青地「反キリスト教文献集『破邪集』の出版とその

影響について」

近藤 成一「天皇の譲位と院政——鎌倉時代を中心に——」
 〈第七回研究会〉

二〇一七年七月二十九日

深川 真樹(ゲストスピーカー)『春秋繁露』の郊祀論

工藤 卓司(ゲストスピーカー)「前漢の「胎教」の思想

とその政治的意義」

末永 高康(ゲストスピーカー)「礼経の理念と現実——前

漢廟制論議における」

二〇一七年七月三〇日

佐藤 將之「礼治思想の形成とその思想的ダイナミズム」

渡邊 義浩「『漢書』が描く在るべき「古典中国」像」

〈第八回研究会〉

二〇一七年一月四日

(所外開催 早稲田大学)

国史跡・林氏墓の見学

遠藤 基郎「過差の権力論——鎌倉時代後期篇」

末木 文美士「王権と神仏——日本思想史の構造」

〈第九回研究会〉

二〇一八年一月二七日

重田 みち「世阿弥能楽論に見る道学の反映——藝道思想の

画期としての足利義持政権期」

伊藤 聡「三輪流神道の形成―密教法流から神道流派へ」

吾妻 重二「荻生徂徠における儒教儀礼の解体」

〈第一〇回研究会〉

二〇一八年二月二四日

〔所外開催 根津育英会・武蔵大学〕

黒岩 高「伝統の再生と創成——中国ムスリムの書法」

並びに、中国ムスリム書道作品（ムスリム書法家・馬

国鋒、馬継勝の両氏の作品を中心に）の内覧とデモン

ストレーションDVD（馬継勝氏）の視聴」

西澤 治彦「蘇北におけるプロテスタントの布教活動——

アブサラム・サイデンストリッカーを中心に」

多文化交渉における『あいだ』の研究

〔研究代表者 稲賀 繁美〕

〔共同研究者名〕

榎本 渉、郭 南燕、フレデリック・クレインス、宮崎

康子、石川 肇、杉田 智美、春藤 猷一、片岡 真伊、

古川 綾子、根川 幸男、今泉 宜子、林 洋子、青木 〓

シラルデッリ 美由紀、メーガン・ジョーンズ、バート・

ウインザー・ルタマキ、ニコラ・フィエヴェ、鶴戸 聡、江

口 久美、大西 宏志、岡本 光博、小川 さやか、隠岐

さや香、小倉 紀蔵、金子 務、九里 文子、鞍田 崇、

近藤 高弘、申 昌浩、鈴木 洋仁、莊 千慧、滝澤 修

身、武内 恵美子、竹村 民郎、多田 伊織、千葉 慶、

テレングト・アイトル、戸矢 理衣奈、中村 和恵、長

門 洋平、西原 大輔、二村 淳子、朴 美貞、橋本 順

光、範 麗雅、平松 秀樹、平芳 幸浩、藤原 貞朗、へ

レナ・チャブコヴァー、堀 まどか、松嶋 健、三原 芳

秋、マシュー・ラーキング、山本 麻友美、村中 由美

子、林 久美子、森 洋久

〔海外共同研究員名〕

デンニツァ・ガブラコヴァ、近藤 貴子、ミツヨ・デル

クルル・糸永

〈第七回研究会〉

二〇一七年六月二三日

テーマⅠ…洞窟から「あいだ」を考える

趣旨説明…稲賀 繁美

今泉 宜子「洞窟の身体―なぜ、穴に惹かれるのか」

港 千尋（ゲストスピーカー）「原初のあいだ…洞窟の想

「像力」

討論・港×稲賀 繁美 のち 全体討論

二〇一七年六月二四日

テーマⅡ…手の思想と触の世界

金子 務 「手の思想と触の世界」

質疑応答

〈第八回研究会〉

二〇一七年七月七日

テーマⅠ…〈あいだ〉としての地域医療——べてるの家

の実践から考える

導入…三原 芳秋

松嶋 健 「海と冗長性」イタリアにおける地域精神保健を

めぐって」

向谷地 生良 (ゲストスピーカー) 「べてるの家」という

〈あいだ〉」

全体討論

二〇一七年七月八日

テーマⅡ…現代史研究における「あいだ」の問題—職場の

歴史をつくる会に関連して

古川 誠 (ゲストスピーカー) 「職場の歴史の社会的・文

「化的意味」

竹村 民郎 「歴史学における「あいだ」の研究について

—職場の歴史をつくる会に関連して—

質疑応答

〈第九回研究会〉

二〇一七年七月三〇日

テーマⅠ…文化間翻訳の現場—言語内翻訳の場合

片岡 真伊 「日本近代文学の英訳現場にみる「あいだ」の

諸相」

村中 由美子 「〈あいだ〉の作家、マルグリット・ユルス

ナールと『源氏物語』」

全体討論

二〇一七年七月三一日

青木リジラルデッリ 美由紀 「〈あいだ〉の都市、〈あい

だ〉の芸術家…イスタンブールのパリ人、レオン・パル

ヴィツレと仕事の周辺」

ミツヨ・デルクール・糸永 「日本の「包む」文化と空間性

について」

多田 伊織 「コレクターの衰退 断捨離・生前整理と身辺

の文化」

質疑応答

〈第一〇回研究会〉

二〇一七年九月二五日

テーマI…芸術と社会組織のあいだ——インド、中国、日

本

ヘレナ・チャブコヴァー「シュリー・オーロピンド・アー

シュラム——アートと生活の間」

莊 千慧「神智学徒H・P・シャーストリ（1882—

1956）のアジア滞在——靈性運動とコロニアリズ

ムのあいだ」

堀 まどか「境界者の文芸と民族運動のあいだ——ヨネノ

グチと中印の詩人」

総合討論

二〇一七年九月二六日

テーマII…「長崎料理——和・華・蘭——」

滝澤 修身「長崎料理——和・華・蘭——」

討論

戦争と鎮魂

〔研究代表者 牛村 圭〕

〔共同研究者名〕

ジョン・ブリーン、稲賀 繁美、倉本 一宏、松田 利

彦、劉 建輝、磯前 順一、郭 南燕、西田 彰一、南

直子、今泉 宜子、鄭 相哲、白石 恵理、岩崎 徹、大

東 和重、加藤 めぐみ、川村 覚文、川本 玲子、栗原

俊雄、古田島 洋介、小堀 馨子、佐伯 順子、谷口 幸

代、竹村 民郎、等松 春夫、永井 久美子、西原 大

輔、眞嶋 亜有、竹ノ内 文美、吉田 優貴、末木 文美

士、堀 まどか、朴 美貞、平松 隆円

〔海外共同研究員名〕

ケビン・ドーク、エヤル・ベン・アリ、徐 載坤、金 志映

〈第四回研究会〉

二〇一七年八月二三日

古田島 洋介「能「鎮魂」鑑賞記」

竹ノ内 文美「胡桃澤盛日記からみる戦争と鎮魂」

二〇一七年八月二四日

末木 文美士「告発し、和解する死者」

〈第五回研究会〉

二〇一七年二月一六日

(所外開催 明治神宮社務所講堂)

小堀 桂一郎 (ゲストスピーカー) 「兵士の靈を祀る傳統の發祥」

コメント・等松 春夫

二〇一七年二月一七日

(所外開催 聖徳記念絵画館会議室)

今泉 宜子 「聖徳記念絵画館設立過程と戦争画の位置」

落合 則子 (ゲストスピーカー) 「川村清雄の構想画と鎮

魂―《振天府》の制作をめぐる―」

〈第六回研究会〉

二〇一八年三月一八日

研究成果刊行物について―予定原稿のテーマなど

岩崎 徹 「シェイクスピアの英国史劇における「戦争と鎮

魂」―『ヘンリー5世』を中心に―」

全体討論

二〇一八年三月一九日

西田 彰一 「寛克彦の戦争と鎮魂」

全体討論

近代東アジアの風俗史

(研究代表者 井上 章一)

(共同研究者名)

劉 建輝、北浦 寛之、石川 肇、齋藤 光、申 昌浩、

永井 良和、西村 大志、濱田 陽、李 珣淑

〈第一回研究会〉

二〇一七年一月四日

井上 章一 「魂の風俗史―私はなぜこの問題にこだわるのか」

全員 「次年度以降、研究会をどうすすめるか」

二〇一七年一月五日

井上 章一 「裸体美術の比較東アジア史」

劉 建輝 「チャイナドレスから見えること」

〈第二回研究会〉

二〇一八年三月一〇日

齋藤 光 「モダンガールの1920年代」

石川 肇 「モボの生態」

二〇一八年三月一日

申 昌浩 「兩大戦間期の新女性」

嘉本 伊都子 「なぜ花嫁は、海をわたったのか」

(文責：研究協力課)